

# 中国と日本の小学校音楽科カリキュラムの比較研究

—1947年から2001年までの国定カリキュラムを中心として—

呉 非

(本講座博士課程後期在学)

## I はじめに

中国と日本の学校音楽教育は、100年にわたって、それぞれの政治、経済及び文化的な背景のもとに大きく発展してきた。特に、第二次世界大戦後、時代の変遷とともに、中日両国の音楽科カリキュラムは社会の進展、教育制度の改善に伴い、劇的に変貌してきた。中国においては、社会主義的な学校教育制度が設立されると同時に、新たに成立された国の社会的要請と児童・生徒の心身発達の特徴に応じて、音楽科カリキュラムは知識の習得、品性の育成、及び愛国主義教育の徹底の三位一体のカリキュラムになった。日本においては、カリキュラムが国家主義的なカリキュラムから経験主義的なカリキュラムに転換されることによって、音楽教育の理念も徳性教育から情操教育へ変化した。また、両国とも初めて教育の目的、内容、範囲、実施に際しての留意点などが定め、中国では数年ごとに、日本ではほぼ十年ごとに、社会の進歩に学校の学習内容を適応させるために改訂を重ねた。さらに、国際化、情報化によって、科学技術が急速に発展している新しい時代に入って、両国とも新たな教育改革が行われた。2001年の「国家义务教育课程标准」の制定と1998年の「学習指導要領」の改訂は、両国の教育改革の具体的な成果である。

本研究では、戦後「课程标准」（教学大綱）と「学習指導要領」の構成、目標、及び学習領域に焦点を当てて、両国の音楽科カリキュラムがどのように変容して現在に至ったかを明らかにする。さらに、両国音楽科カリキュラムの変容の特徴と音楽教育の現状を比較し、検討する。その際、中国においては、1950年版のものから2001年版までの7期の音楽教学大綱と課程標準、日本においては、昭和22年版のものから、平成10年度のものまでの7期の学習指導要領を取り上げることとする。

## II 中国の小学校音楽科カリキュラムの変遷

中国では、1949年中華人民共和国の成立以来、21世紀に入るまで、6つの「小学校音楽教学大綱」が改訂された。それぞれ1950年、1956年、1979年、1982年、1988年、1992年版のものである。2001年に制定された「義務教育音楽課程標準」は現行版として使用されている。以下、これらの「教学大綱」と「課程標準」の構成、目標、及び学習領域の3つの視点から、中国の小学校音楽科カリキュラムの流れと特徴を捉える。

### (1) 構成について

1950年版の教学大綱はそれ以前の学校音楽教育の経験を参考とし、教育目標、内容、実施要点の3つの部分に分けて述べられている。1956年版の教学大綱は50年代初期の学校音楽教育の経験を参考と、それにソ連のカリキュラムを模倣して制定された。この教学大綱は教育の目的、授業の指導法、課外活動、教学整備などが述べられている。それ以後の教学大綱の構成は複雑かが図られていく。1979年の教学大綱では「学習結果の考查」、1992年の教学大綱では「注意すべき問題」が加わった。1992年版までの小学校音楽科教学大綱は具体的な学習内容、指導法、及び教材に限定して、音楽科の知識が重視されており、学校音楽教育のより深い原理的な認識に関する記述が全く見られなかった。2001年度の「課程標準」では音楽の本質、音楽教育の理念などが初めて述べられ、学校教育における音楽科の価値、目的などを徹底的に見直された。

## (2) 目標について

「美育」が学校教育の中に占める地位の変化に従って、中国の音楽カリキュラムは1950年の審美教育の役割を担うカリキュラムから、70年代の道德教育と知識習得を重視するものへ転換され、現在審美教育の本質へ回帰されたと考えられる。中華人民共和国が成立してから、「美育」は学校教育の1つの重要な部分と認められた。その時、小学校における「美育」の具体的な目標は「美を愛好する観念を培い、芸術を鑑賞する能力を育てる」<sup>1)</sup>であった。それによって、1950年版の教学大綱では音楽知識の習得が目標の首位に位置づけられるとともに、児童の音楽への興味を培うこと、音楽を通して身心を陶冶して優れた品性を育成することが強調された。また、音楽を通して奉仕心の育成することなど社会主義教育に対応する目的も定められた。

50年代中期から70年代末期までの不安定な社会状況の下に、政治のための教育が強調され、「美育」が批判され、学校教育の中からなくなったとともに、音楽科は授業時数を縮小され、学校教育における地位が弱体化された。その時期の音楽教育は主に社会の発展を支える人材を育成するという愛国主義教育の重任を担っていた。1978年から、社会状況が安定するとともに、学校音楽教育の重要性が認識されてくるようになった。1979年版の教学大綱では、初めて「音楽的表現力、感受力、及び審美力を養う」という目標が掲げられた。80年代には、「義務教育法」の実施により、「美育」（音楽・美術・演劇・舞踊）の1つの科目とされた音楽科は初等教育の必修科目になった。1992年版の教学大綱では、「知性の啓発、情操の陶冶、審美感情の育成、音楽を愛好する心情を培うこと」などが目標に加えられた。2001年版の課程標準では、「素質教育」の理念に対応して、人文と審美の本質を強調し、「審美感情」、「音楽を愛好する態度」、及び「正しい価値観を養うこと」を目標の首位に位置づけた。

## (3) 学習領域について

中国の音楽カリキュラムは、それぞれの教育観の転換に従って、様々な曲折を経ながらも進められ、学習内容が豊富になった。音楽科の学習活動の基本形態は歌う、奏する、作る、聴くという4つにまとめたものである。1950年版教学大綱では創作を学習内容とせず、ソルフェージュの面で音楽的技能を育成することが重視されている。その時の学習領域には歌唱、読譜、器楽、鑑賞、の4つの領域である。50年代中期から70年代までの間は、学校教育が政治のための教育、科学化、体系化を強調する時期であった。それによって、1956年版と1979年版の教学大綱では器楽と鑑賞の学習領域を削除し、歌唱活動によって音楽の基礎的能力を発達させることに重点をおいた。

80年代から、改革開放に伴い、音楽科教育が多様化されるとともに、鑑賞が再び学習領域として教学大綱の中にあげられるようになった。1988年版の教学大綱では、1956年の「読譜」と1982年版の「音楽知識と技能」が「読譜と視唱聴音」にまとめられ、また、新たに「唱遊」が加えられた。「唱遊」領域の内容は、低学年の児童が遊びの要素や体の動きを運用して音楽の活動を行うことである。90年代に入って、素質教育（個人能力の育成、個性の伸長などを目的とする基礎教育）の教育観に従って、音楽科の学習領域も言うまでもなく広範になった。それによって、1992年版の教学大綱では1988年版のものを継承したうえで、1956年から削減された「器楽」が再び取り上げられた。

2001年の基礎教育の改革によって、教学大綱が課程標準に変わるとともに、音楽の学習領域の分け方も大きく変わった。課程標準では1992年版の「読譜と視唱聴音」がなくなり、「鑑賞」が「感受と鑑賞」に変わり、「歌唱」、「器楽」、及び「唱遊」が「表現」の1つの領域にまとめられ、また、初めて創作領域があげられている。それに、新たに「音楽と関連文化」が加えられた。「音楽と関連文化」には、音楽と社会生活、音楽と他の芸術、音楽と他教科の3つの部分が含まれている。このように、課程標準では学習領域の数は少なくなるが、学習内容は従来のものより幅広くなっていることがわかる。

表1 中国の小学校音楽教学大綱と課程標準の変遷

	内容構成	教育目標	学習領域
1950年版 教学大綱	教育目標 教材大綱 教学要点	①発声、聴音、歌唱、簡単な演奏の音楽知識と技能を培う。 ②音楽を愛好する心情を育て、音楽で身心を陶冶し、生活を豊かにし、人々と社会に奉	歌唱 読譜 器楽 鑑賞

		仕する心情を育成する。 ③活発な、愉快な、熱心な、勇敢な性格を育て、道徳感に富み、祖国と世界平和を守る愛国主義の感情を育成する。	
1956年版 教学大綱	目的と内容 教学方法 課外活動 教学設備 教学大綱（内容） 歌唱教材一覧表 （参考用）	社会主義社会の人材を全面的に培養する	歌唱（歌唱技術、 音楽知識）
1979年版 教学大綱	目的 教学内容と方法 学習結果の考査 課外活動 教学設備 各学年の目標と内容	①革命の理想を啓発し、優良な品格をみがい、高尚な情操を育成し、感情を豊かにし、心身に発展を健全にさせる ②祖国の音楽芸術を愛好する心情を育て、外国の優れた音楽を理解させ、基本的な音楽知識と技術を習得させ、表現力、感受力及び審美力を養う	歌唱 音楽知識と技能
1982年版 教学大綱	教育目的 教学内容と方法 学習結果の考査 課外活動 教学設備 各学年の目標と内容	同上	歌唱 音楽知識と技能 鑑賞
1988年版 教学大綱	教育目的 教学内容と方法 学習結果の考査 課外活動 教学設備 各学年の目標と内容	①音楽への興味を培い、基本的な音楽知識と技術を習得させ、表現力、感受力、及び審美力を養う ②祖国の音楽芸術を愛好する心情を育て、外国の優れた音楽を習得させる ③道徳感を培い、想像力と思考力を育て、豊かな情感を養う	歌唱 唱遊（1-2学年のみ） 鑑賞 読譜と視唱聴音
1992年版 教学大綱	教育目的 教学内容と基本的目標 各学年の内容 歌唱教材一覧表 課外活動 学習結果の考査 教学設備 注意すべき問題	①祖国愛、人民愛、労働愛、社会主義愛の教育、活発で楽観的な情緒、集団主義精神の育成と理想豊かで、道徳的、文化的、規律的な社会主義の後継者と建設者の育成。 ②知性の啓発、情操の陶冶、審美感情の育成と健康的な心身の育成。 ③音楽を愛好する心情を培うことと平易な音楽の基礎的な知識、技能の習得。 ④中国の諸民族民間音楽の理解、民族の自尊心や自信の育成と外国の優れた音楽を通じた音楽的視野の拡大	歌唱 唱遊（1-2学年のみ） 器楽 鑑賞 読譜と視唱聴音

2001年版 課程標準	課程の性質と価値 基本理念 課程目標（一般目標と各 学年目標） 内容標準 実施意見（教学意見、評 価意見、課程の開発と 利用、教材の編成の意 見）	審美感情を育てる 音楽を愛好する趣向を育てる 正しい価値観を養う 音楽の感受力、鑑賞力、表現力及び創造力を 培う 音楽文化の素養を高める 感情体験を豊かにし、高尚な情操を陶冶する	感受と鑑賞 表現 創作 音楽と関連文化
----------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------

### Ⅲ 日本の小学校音楽カリキュラムの変遷

日本の学習指導要領は、1947年に試案が発表されて以来、およそ10年ごとにほぼ定期的に改訂されている。ここでは昭和22年（1947）版、昭和26年（1951）版、昭和33年（1958）版、昭和43年（1968）版、昭和52年（1977）版、平成元年（1989）版、平成10年（1998）版の小学校学習指導要領を対象として日本の初等音楽カリキュラムの流れと特徴を捉える。

#### (1) 構成について

昭和22年版（試案）と昭和26年版（試案）の学習指導要領では芸術としての音楽の本質、音楽教育の目標構成の原則、及び音楽と他教科の関連などが系統的に述べられ、児童の心理的段階の特徴に対応する指導法などが詳しく掲げられている。これらの学習指導要領は音楽科のカリキュラムを示しているだけでなく、教師自身が研究していく手引きとして書かれたものだといえる。昭和33年版学習指導要領では当基礎学力を充実し、教育を効率化するという教育方針に従って、各学年の指導の重点を明らかにするために、構成が整えられ、かなり簡素になった。それ以後、平成10年までの学習指導要領では一貫して目標、各学年の目標及び内容、指導計画の作成と内容の取扱い、という3つの部分で組み込まれている。

#### (2) 目標について

戦後日本の音楽教育の目標は音楽の美的情操の育成をもとにそれぞれの時代における教育の課題と社会的問題に対応して設定されたものである。昭和22年版学習指導要領によると、音楽教育は従来の道徳教育の達成を目標にせず、情操教育を目標にしている。「音楽教育即情操教育ということで、音楽美の理解・感得が直ちに美的情操の養成となる。美的情操を養成すれば、その人は美と秩序とを愛するようになり、それはとりもなおさず社会活動における一つの徳を養うことになる」<sup>2)</sup>。昭和26年版学習指導要領（試案）では、昭和22年版学習指導要領の「音楽美の理解・感得」を行い、によって美的情操や人間性を養うという目標が、「音楽経験を通して」に変化してきた。昭和33年版学習指導要領の教育目標は、昭和22年版と昭和26年版の美的情操を養うことを継承し、音楽的な感覚の発達を図っている。

昭和43年版の学習指導要領は、科学技術の急激な進展と社会、文化、経済の変化と発展の現実に向けてつくられたものである。音楽科の教育目標は、昭和33年版の情操を「養う」ことが「高める」へ変更され、「音楽経験」と「音楽的感覚」が「音楽性」にまとまり、また、創造性を養うことが初めて掲げられた。昭和52年版学習指導要領は文化の発展、価値観の多様化などの社会状況の変化に応じて、昭和43年版の「音楽性」と「情操」を継承し「創造性」をなくなり、初めて音楽を愛好する心情を育成することに教育目標の重点を置いた。平成元年版では「音楽性」が「音楽性の基礎」に充実され、「音楽に対する感性を育てる」が教育目標に加えられた。平成10年版の学習指導要領では豊かな人間性と生きる力を育成する改訂方針に従って、教育目標は音楽を愛好する心情を育成することが一層強調され、また、「音楽性の基礎を培う」の代わりに、「音楽活動の基礎的な能力を培う」へ変更された。昭和52年版、平成元年版と平成10年版比べると、目標は文章表現が少し変わる程度で、大きく変化していない。

#### (3) 学習領域について

学習領域の変化の流れを見ると、日本の音楽科の学習領域には基本的に歌唱、器楽、鑑賞、創作の4つの学習領域が含まれている。しかし、この基本構造は各学習指導要領で大きく変更されていることが分か

る。昭和22年版学習指導要領では、児童の学習経験の形で「歌唱教育」、「器楽教育」、「鑑賞教育」、「創作教育」の4つの領域があげられている。昭和26年版学習指導要領では22年版の「歌唱」、「器楽」、「鑑賞」の3つの領域はそのままであるが、「創作教育」が「創作的な表現」に変更され、「リズム反応」という新領域が加わられた。創作的な表現という領域は「歌遊びをしたり、あるいは楽器遊びをしたり、または音楽劇を作ったり」というようなものである<sup>3)</sup>。リズム反応は主として「身体的反応を通して、音楽によって目覚めた感情を表現しようとするものであり、歌遊びやリズム・バンドなどの活動も含まれている」<sup>4)</sup>。

昭和33年版の学習指導は昭和26年版で取り上げられた「創作的な表現」と「リズム反応」がなくなり、歌唱、器楽、及び創作が「表現」という1つの大きな領域にまとめられている。そして、学習領域は「表現」と「鑑賞」の2領域で構成された。昭和43年版学習指導要領では、歌唱、器楽、創造、鑑賞の4つの領域に各領域に分散していた基礎的な内容をまとめ、新たに「基礎」が加えられた。つまり、「基礎」は、音楽を構成するリズム、旋律、和声など基礎的な要素であり、音楽の基礎的な能力の定着を図るのである。昭和52年版から、平成10年版までの学習指導要領では「基礎」領域がなくなり、指導の効果を高めるために領域を整理して表現と鑑賞の2つに統合し、学習内容を精選している。

表2 日本の学習指導要領の変遷

	内容の構成	教育目標	学習領域
昭和22年(1947)版 学習指導要領	音楽の本質 音楽教育の目標 音楽の学習と児童の発達 教程一覧表 音楽の学習指導及び音楽 と他教科及び学校生活 との関連 音楽指導における考査 各学年の音楽指導 諸注意 歌唱教材一覧表 前歌唱教材とその指導上 の要点 鑑賞レコード教材一覧表 参考書	音楽美の理解・感得を行 い、これによって高い美 的情操と豊かな人間性と を養う	歌唱 器楽 鑑賞 創作
昭和26年(1951)版 学習指導要領	音楽教育の本質 音楽教育の目標 児童の音楽的発達 各学年の指導目標と指導 内容 音楽経験の指導法 他教科との関連ならびに 教科外の諸活動および 学校外生活との関連 音楽学習の評価 付録(鑑賞用音楽レコー ド、参考書)	音楽経験を通して、深い 美的情操と豊かな人間性 とを養い、円満な人格の 発達をはかり、好ましい 社会人としての教養を高 める	歌唱 器楽 鑑賞 創作的表現 リズム反応

昭和33年(1958)版 学習指導要領	目標 各学年の目標及び内容 指導計画の作成と内容の 取扱い	音楽経験を豊かにし、音 楽的感覚の発達を図ると ともに、美的情操を養う	鑑賞 表現(歌唱、器楽、創作)
昭和43年(1968)版 学習指導要領	目標 各学年の目標及び内容 指導計画の作成と内容の 取扱い	音楽性を培い、情操を高 めるとともに、豊かな創 造性を養う	基礎 鑑賞 歌唱 器楽 創作
昭和52年(1977)版 学習指導要領	目標 各学年の目標及び内容 指導計画の作成と内容の 取扱い	表現及び鑑賞の活動を通 して、音楽性を培うとと もに、音楽を愛好する心 情を育て、豊かな情操養 う	表現 鑑賞
平成元年(1989)版 学習指導要領	目標 各学年の目標及び内容 指導計画の作成と内容の 取扱い	音楽性の基礎を培う 音楽を愛好する心情と音 楽に対する感性を育てる 豊かな情操を養う	表現 鑑賞
平成10年(1998)版 学習指導要領	目標 各学年の目標及び内容 指導計画の作成との取扱 い	音楽を愛好する心情と音 楽に対する感性を育てる 音楽活動の基礎的な能力 を培う 豊かな情操を養う	表現 鑑賞

#### IV 考察

以上の分析によって、中国と日本の音楽科カリキュラム発展の相違は次のようにまとめた。

(1) 中国の音楽科カリキュラムは指導実践からの確かな音楽教育理念に導かれて発展している。

日本の音楽カリキュラムは確かな音楽教育観に基づき、実践の状況を反省しながら、発展している。

(2) 中国の音楽科カリキュラムの目標は曲折を経て、審美教育の役割を担うカリキュラムから、道徳教育と知識習得を重視するカリキュラムへ変化され、現在では再び審美教育の本質へ回帰された。日本の音楽カリキュラムの目標は、音楽の美的情操の育成をもとにそれぞれの時代における教育的課題と社会的問題に対応して定められたものである。中国のカリキュラムの目標は劇的に変化しているが、日本のそれは相対的に安定しているといえる。

(3) 中国の音楽科教育は、歌唱を主とした50年代から、音楽感受と音楽技能を加えた80年代を経てさらに、音楽と社会生活、音楽と他の芸術、及び音楽と他の教科の3つの内容を含むものへ発展して、内容が拡大し、学習領域が多くなっている。一方、日本の音楽科教育は内容を縮小し、学習領域が減少している。

(4) 中日両国ともソルフェージュの能力ことの育成が重視された時期があったが、中国ではその期間が日本よりも長く続いた。中国では「音楽知識と技能」、「読譜と視唱聴音」などが1979年から1992年までの教学大綱の中に、独立な領域として存在していた。しかし、日本では、「基礎」という領域が昭和43年版の学習指導要領で新設されたが、昭和52年からは削除された。「基礎」領域の目標は中国の「読譜と視唱聴音」の目標とほぼ同様であり、「聴取、読譜、記譜能力を育て、楽譜についての理解を深める」<sup>5)</sup>ことである。

## V おわりに

1949年以降の中国は長い間の半殖民地、半封建社会から、政治的、経済的に独立した社会に変わって、文化大革命や改革開放などの社会変革を経て、激変の道に歩んでいる。戦後の日本では、安定した社会秩序の下で、より平坦な道を進んでいる。中日の音楽科カリキュラムにおけるそれぞれの相違が生じる原因として、教育制度の相違、音楽教育の実践と理論の相違のほか、両国の政治、経済の発展の実情も大きく影響をしていると考えられる。日本では音楽科教育の基本理念は昭和33年（1958）版の学習指導要領から消除されたが、中国では2001年版の課程標準で初めて述べられた。中国の課程標準であげられている「音楽と関連文化」は、日本の学習指導要領で一度も学習領域としてあげられていない。これらは課程標準と学習指導要領の最大の相違だといえる。しかし、教師が音楽科教育の本質に対する認識を高めないと、音楽教育の実践が本質から外れる可能性もあるだろう。さらに、「音楽と関連文化」は、課程標準の大きな特徴と認められているが、実際の授業で、どのように音楽、その文化的意義、及び音楽が生じる文化的背景の3つを効果的に連結するのは容易ではない。今後、以上の問題に対して、両国の音楽教育の実践を分析し、音楽科授業の現場から両国の音楽科カリキュラムの実態を考察していきたい。

## VI 引用文献

- 1) 姚思源 (2000) 『中国当代学校音楽教育文献 (1949-1995)』上海教育出版社 p. 5
- 2) 文部省 (1947) 『小学校学習指導要領 音楽科編 (試案)』東京書籍 p. 1
- 3) 浜野政雄著作編集委員会 (1982) 浜野政雄評論集『戦後音楽教育は何をしたか』音楽之友社 p. 19
- 4) 小学校音楽教育講座 第3巻 『音楽科教育法』(1983) 音楽之友社 p. 76
- 5) 文部省 (1968) 『小学校学習指導要領』大蔵省印刷局 p. 133

## VII 参考文献

- 文部省 (1947) 『小学校学習指導要領 音楽科編 (試案)』東京書籍  
文部省 (1951) 『小学校学習指導要領 音楽編 (試案)』教育出版  
文部省 (1958) 『小学校学習指導要領』大蔵省印刷局  
文部省 (1968) 『小学校学習指導要領』大蔵省印刷局  
文部省 (1977) 『小学校学習指導要領』教育芸術社  
文部省 (1989) 『小学校学習指導要領』教育芸術社  
文部省 (1998) 『小学校学習指導要領』教育芸術社  
伊藤信隆 (1983) 『教育課程論』建帛社  
井上武士 (1967) 『音楽教育明治百年史』音楽之友社  
浜野政雄著作編集委員会 (1982) 浜野政雄評論集『戦後音楽教育は何をしたか』音楽之友社 日本音楽教育学会 (1979) 『音楽教育学の展望』音楽之友社  
近森一重 (1951) 『音楽教育課程とその構成』音楽之友社  
真篠 将 (1973) 『音楽科の基礎指導』明治図書  
真篠 将 (1986) 『音楽教育を語る』音楽之友社  
水原克敏 (1992) 『現代日本の教育課程改革』風間書房 小学校音楽教育講座 第3巻 『音楽科教育法』(1983) 音楽之友社  
姚思源 (2000) 『中国当代学校音楽教育文献 (1949-1995)』上海教育出版社  
姚思源 (2000) 『中国当代学校音楽教育文選 (1949-1995)』上海教育出版社  
曹 理 (1990) 『普通音楽教育概論』北京師範大学出版社  
李渝梅 李方元 「音楽課程編制中有關課程知識的幾個理論問題的討論」『音楽研究』2004. 人民音楽出版社  
郭声健 「新中国普通学校音楽教育50年」『音楽研究』2000. 4 人民音楽出版社  
王安国 「新中国普通学校音楽教育50年」『中央音楽学院学报』2000. 4